



## いのちをつなぐということ

園長 米澤 千秋

先週、飼育していたモルモットのぷりんが亡くなるという悲しい出来事がありました。学級で集まり、教師が「ぷりんは6歳のお誕生日が来たんだけど、人間の6歳よりモルモットの6歳はおじいちゃんなんだって。だから、寿命って言って、だんだん元気が無くなって死んでしまったんだね。。。と、伝えました。

毎日お世話をしていた年長ゆり組の子どもたちは、「本当に死んじゃったの?」「悲しいね」「もう冷たくなっちゃったんだ」「この前の病気は治ったのにね。。。などと、思い思いにつぶやいています。教師は「みんなが今までお世話してくれたから、ぷりんちゃんはすごく嬉しかったと思うよ」と、子どもたちの気持ちに寄り添います。ぷりんが数か月前に体調を崩したときも、「いつものぷりんじゃないみたい」「目が見えないのかな・・・」「えさもあんまり食べないね」と、子どもたちはぷりに気持ちを寄せていました。教師は「そうだね。お医者さんに診てもらおうね」と、子どもたちの気持ちを受け止めました。そしてぷりんが病院から帰ってくると、子どもたちは「早くよくなってね」と声を掛けたり、お見舞いの手紙をゲージに貼ったりするなど、優しい姿が多く見られました。

年少もも組の子どもたちも、「もう動かないの?」「ぷりんちゃん可愛かったね」と、目の前にいるぷりんの様子をじっと見ていました。

そして保護者の方が「お兄ちゃんが通っていた時からいたので、会いに来たい人がいるかもしれません」と、修了生にも連絡をしてくださいました。すると、修了生や保護者の方が何人もお別れに来てくれました。「ゆり組の時にぷりんが来て、みんなで名前を考えました」「お野菜が大好きだったよね」「いなくなっちゃって寂しいです」などの声を聞き、みんなに愛されて、ぷりんのいのちがつながっていたのだと、深く感じました。

このように多くの子どもたちや保護者の方の心の中に、ぷりんとのお思い出が残されている姿から、幼児期に身近な動物に親しみをもって触れ合う経験が、いのちの尊さを感じる上でとても重要であるということを実感しました。今後も、生き物との触れ合いを大切に、子どもたちの豊かな心を育ててまいります。



手紙やお花を作って  
ぷりに贈りました。  
いままで、ありがとう

先日は、保育参観にご参加いただきありがとうございました。感想の一部をご紹介します。

- ・お友達への興味や関心、仲間意識など、心が育っているなと感じました。
- ・製作物を遊びの中に取り入れる、チームの意識、勝ち負けの嬉しさと悔しさを知る、数字を身近に感じるなど、保育の内容を知ることができ、とても勉強になりました。
- ・先生に促されつつ自分のペースでやる事やっており、家と比べて頑張っているのを感じました。
- ・お友達との関わり方や話の仕方が去年と比べて、落ち着いてきており、成長を感じました。
- ・話には聞いていましたが、当番活動もみんなで頑張っているんですね。大きな成長を感じました。
- ・我が子も含めてですが、先生やお友達が話している時の姿勢や態度などはこれからの課題かなと思いました。小学校に向けて、成長して行ってほしいなと思いました。

お子さんの成長や、今後大切にしていきたいことなどを保護者の皆様と共有する機会となり、嬉しく思います。お寄せいただいたご意見やご感想を今後の保育に生かしてまいります。